

お客様各位

---

## カタログ等資料中の旧社名の扱いについて

---

2010年4月1日を以ってNECエレクトロニクス株式会社及び株式会社ルネサステクノロジが合併し、両社の全ての事業が当社に承継されております。従いまして、本資料中には旧社名での表記が残っておりますが、当社の資料として有効ですので、ご理解の程宜しくお願ひ申し上げます。

ルネサスエレクトロニクス ホームページ (<http://www.renesas.com>)

2010年4月1日  
ルネサスエレクトロニクス株式会社

【発行】ルネサスエレクトロニクス株式会社 (<http://www.renesas.com>)

【問い合わせ先】<http://japan.renesas.com/inquiry>

## ご注意書き

1. 本資料に記載されている内容は本資料発行時点のものであり、予告なく変更することがあります。当社製品のご購入およびご使用にあたりましては、事前に当社営業窓口で最新の情報をご確認いただきますとともに、当社ホームページなどを通じて公開される情報に常にご注意ください。
2. 本資料に記載された当社製品および技術情報の使用に関連し発生した第三者の特許権、著作権その他の知的財産権の侵害等に関し、当社は、一切その責任を負いません。当社は、本資料に基づき当社または第三者の特許権、著作権その他の知的財産権を何ら許諾するものではありません。
3. 当社製品を改造、改変、複製等しないでください。
4. 本資料に記載された回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報は、半導体製品の動作例、応用例を説明するものです。お客様の機器の設計において、回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報を使用する場合には、お客様の責任において行ってください。これらの使用に起因しお客様または第三者に生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
5. 輸出に際しては、「外国為替及び外国貿易法」その他輸出関連法令を遵守し、かかる法令の定めるところにより必要な手続を行ってください。本資料に記載されている当社製品および技術を大量破壊兵器の開発等の目的、軍事利用の目的その他軍事用途の目的で使用しないでください。また、当社製品および技術を国内外の法令および規則により製造・使用・販売を禁止されている機器に使用することができません。
6. 本資料に記載されている情報は、正確を期すため慎重に作成したのですが、誤りが無いことを保証するものではありません。万一、本資料に記載されている情報の誤りに起因する損害がお客様に生じた場合においても、当社は、一切その責任を負いません。
7. 当社は、当社製品の品質水準を「標準水準」、「高品質水準」および「特定水準」に分類しております。また、各品質水準は、以下に示す用途に製品が使われることを意図しておりますので、当社製品の品質水準をご確認ください。お客様は、当社の文書による事前の承諾を得ることなく、「特定水準」に分類された用途に当社製品を使用することができません。また、お客様は、当社の文書による事前の承諾を得ることなく、意図されていない用途に当社製品を使用することができません。当社の文書による事前の承諾を得ることなく、「特定水準」に分類された用途または意図されていない用途に当社製品を使用したことによりお客様または第三者に生じた損害等に関し、当社は、一切その責任を負いません。なお、当社製品のデータ・シート、データ・ブック等の資料で特に品質水準の表示がない場合は、標準水準製品であることを表します。  
標準水準： コンピュータ、OA 機器、通信機器、計測機器、AV 機器、家電、工作機械、パーソナル機器、産業用ロボット  
高品質水準： 輸送機器（自動車、電車、船舶等）、交通用信号機器、防災・防犯装置、各種安全装置、生命維持を目的として設計されていない医療機器（厚生労働省定義の管理医療機器に相当）  
特定水準： 航空機器、航空宇宙機器、海底中継機器、原子力制御システム、生命維持のための医療機器（生命維持装置、人体に埋め込み使用するもの、治療行為（患部切り出し等）を行うもの、その他直接人命に影響を与えるもの）（厚生労働省定義の高度管理医療機器に相当）またはシステム等
8. 本資料に記載された当社製品のご使用につき、特に、最大定格、動作電源電圧範囲、放熱特性、実装条件その他諸条件につきましては、当社保証範囲内でご使用ください。当社保証範囲を超えて当社製品をご使用された場合の故障および事故につきましては、当社は、一切その責任を負いません。
9. 当社は、当社製品の品質および信頼性の向上に努めておりますが、半導体製品はある確率で故障が発生したり、使用条件によっては誤動作したりする場合があります。また、当社製品は耐放射線設計については行っておりません。当社製品の故障または誤動作が生じた場合も、人身事故、火災事故、社会的損害などを生じさせないようお客様の責任において冗長設計、延焼対策設計、誤動作防止設計等の安全設計およびエージング処理等、機器またはシステムとしての出荷保証をお願いいたします。特に、マイコンソフトウェアは、単独での検証は困難なため、お客様が製造された最終の機器・システムとしての安全検証をお願いいたします。
10. 当社製品の環境適合性等、詳細につきましては製品個別に必ず当社営業窓口までお問合せください。ご使用に際しては、特定の物質の含有・使用を規制する RoHS 指令等、適用される環境関連法令を十分調査のうえ、かかる法令に適合するようご使用ください。お客様がかかる法令を遵守しないことにより生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
11. 本資料の全部または一部を当社の文書による事前の承諾を得ることなく転載または複製することを固くお断りいたします。
12. 本資料に関する詳細についてのお問い合わせその他お気付きの点等がございましたら当社営業窓口までご照会ください。

注 1. 本資料において使用されている「当社」とは、ルネサスエレクトロニクス株式会社およびルネサスエレクトロニクス株式会社とその総株主の議決権の過半数を直接または間接に保有する会社をいいます。

注 2. 本資料において使用されている「当社製品」とは、注 1 において定義された当社の開発、製造製品をいいます。

# アプリケーション・ノート

## V850ES

### サンプル・プログラム

### コーデック接続編

---

#### 対象デバイス

V850ES/JG3マイクロコントローラ  
V850ES/JJ3マイクロコントローラ  
V850ES/JF3-Lマイクロコントローラ  
V850ES/JG3-Lマイクロコントローラ  
V850ES/HF3マイクロコントローラ  
V850ES/HG3マイクロコントローラ  
V850ES/HJ3マイクロコントローラ

〔メモ〕

## 目次要約

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 第1章 概 説 ...                 | 10 |
| 第2章 オーディオ・コーデック接続方式 ...     | 13 |
| 第3章 アプリケーション実装例 ...         | 18 |
| 第4章 サンプル・アプリケーションのビルド方法 ... | 33 |
| 第5章 サンプル・アプリケーションの実行方法 ...  | 37 |

## CMOSデバイスの一般的注意事項

- (1) 入力端子の印加波形：入力ノイズや反射波による波形歪みは誤動作の原因になりますので注意してください。CMOSデバイスの入力がノイズなどに起因して、VIL (MAX.) からVIH (MIN.) までの領域にとどまるような場合は、誤動作を引き起こす恐れがあります。入力レベルが固定な場合はもちろん、VIL (MAX.) からVIH (MIN.) までの領域を通過する遷移期間中にチャタリングノイズ等が入らないようご使用ください。
- (2) 未使用入力の処理：CMOSデバイスの未使用端子の入力レベルは固定してください。未使用端子入力については、CMOSデバイスの入力に何も接続しない状態で動作させるのではなく、プルアップかプルダウンによって入力レベルを固定してください。また、未使用の入出力端子が出力となる可能性（タイミングは規定しません）を考慮すると、個別に抵抗を介してVDDまたはGNDに接続することが有効です。資料中に「未使用端子の処理」について記載のある製品については、その内容を守ってください。
- (3) 静電気対策：MOSデバイス取り扱いの際は静電気防止を心がけてください。MOSデバイスは強い静電気によってゲート絶縁破壊を生じることがあります。運搬や保存の際には、当社が出荷梱包に使用している導電性のトレイやマガジン・ケース、または導電性の緩衝材、金属ケースなどを利用し、組み立て工程にはアースを施してください。プラスチック板上に放置したり、端子を触ったりしないでください。また、MOSデバイスを実装したボードについても同様の扱いをしてください。
- (4) 初期化以前の状態 電源投入時、MOSデバイスの初期状態は不定です。電源投入時の端子の出力状態や出力設定、レジスタ内容などは保証しておりません。ただし、リセット動作やモード設定で定義している項目については、これらの動作ののちに保証の対象となります。リセット機能を持つデバイスの電源投入後は、まずリセット動作を実行してください。
- (5) 電源投入切断順序 内部動作および外部インタフェースで異なる電源を使用するデバイスの場合、原則として内部電源を投入した後に外部電源を投入してください。切断の際には、原則として外部電源を切断した後に内部電源を切断してください。逆の電源投入切断順により、内部素子に過電圧が印加され、誤動作を引き起こしたり、異常電流が流れ内部素子を劣化させたりする場合があります。資料中に「電源投入切断シーケンス」についての記載のある製品については、その内容を守ってください。
- (6) 電源OFF時における入力信号 当該デバイスの電源がOFF状態の時に、入力信号や入出力プルアップ電源を入れしないでください。入力信号や入出力プルアップ電源からの電流注入により、誤動作を引き起こしたり、異常電流が流れ内部素子を劣化させたりする場合があります。資料中に「電源OFF時における入力信号」についての記載のある製品については、その内容を守ってください。

- ・本資料に記載されている内容は2010年2月現在のもので、今後、予告なく変更することがあります。量産設計の際には最新の個別データ・シート等をご参照ください。
- ・文書による当社の事前の承諾なしに本資料の転載複製を禁じます。当社は、本資料の誤りに関し、一切その責を負いません。
- ・当社は、本資料に記載された当社製品の使用に関連し発生した第三者の特許権、著作権その他の知的財産権の侵害等に関し、一切その責を負いません。当社は、本資料に基づき当社または第三者の特許権、著作権その他の知的財産権を何ら許諾するものではありません。
- ・本資料に記載された回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報は、半導体製品の動作例、応用例を説明するものです。お客様の機器の設計において、回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報を使用する場合には、お客様の責任において行ってください。これらの使用に起因しお客様または第三者に生じた損害に関し、当社は、一切その責を負いません。
- ・当社は、当社製品の品質、信頼性の向上に努めておりますが、当社製品の不具合が完全に発生しないことを保証するものではありません。また、当社製品は耐放射線設計については行っておりません。当社製品をお客様の機器にご使用の際には、当社製品の不具合の結果として、生命、身体および財産に対する損害や社会的損害を生じさせないよう、お客様の責任において冗長設計、延焼対策設計、誤動作防止設計等の安全設計を行ってください。
- ・当社は、当社製品の品質水準を「標準水準」、「特別水準」およびお客様に品質保証プログラムを指定していただく「特定水準」に分類しております。また、各品質水準は、以下に示す用途に製品が使われることを意図しておりますので、当社製品の品質水準をご確認ください。

「標準水準」：コンピュータ、OA機器、通信機器、計測機器、AV機器、家電、工作機械、パーソナル機器、産業用ロボット

「特別水準」：輸送機器（自動車、電車、船舶等）、交通用信号機器、防災・防犯装置、各種安全装置、生命維持を目的として設計されていない医療機器

「特定水準」：航空機器、航空宇宙機器、海底中継機器、原子力制御システム、生命維持のための医療機器、生命維持のための装置またはシステム等

当社製品のデータ・シート、データ・ブック等の資料で特に品質水準の表示がない場合は、標準水準製品であることを表します。意図されていない用途で当社製品の使用をお客様が希望する場合には、事前に当社販売窓口までお問い合わせください。

注1. 本事項において使用されている「当社」とは、NECエレクトロニクス株式会社およびNECエレクトロニクス株式会社がその総株主の議決権の過半数を直接または間接に保有する会社をいう。

注2. 本事項において使用されている「当社製品」とは、注1において定義された当社の開発、製造製品をいう。

(M8E0909J)

# はじめに

**対象者** このマニュアルは、V850ESマイクロコントローラの応用システムを設計、開発するユーザを対象とします。

**目的** V850ESマイクロコントローラでのオーディオ・コーデック接続方法についてユーザに理解していただくことを目的とします。

**構成** このマニュアルは、大きく分けて次の内容で構成しています。

- ・概 説
- ・オーディオ・コーデック接続方式
- ・アプリケーション実装例
- ・サンプル・アプリケーションのビルド方法
- ・サンプル・アプリケーションの実行方法

**読み方** このマニュアルの読者には、電気、論理回路、マイクロコンピュータおよびC言語に関する一般知識を必要とします。

本アプリケーションの実行評価環境を理解しようとするとき

ヒューマン・マシンI/Fデモ用ボードまたは漢字表示デモ用ボードの**ユーザーズ・マニュアル**を参照してください。

マイクロコントローラのハードウェア機能の詳細を理解しようとするとき

各製品の**ユーザーズ・マニュアル ハードウェア編**を参照してください。

**凡 例** データ表記の重み：左が上位桁，右が下位桁

アクティブ・ローの表記： $\overline{\text{xxx}}$ （端子，信号名称に上線）

メモリ・マップのアドレス：上部 - 上位，下部 - 下位

注：本文中に付けた注の説明

注意：気を付けて読んでいただきたい内容

備考：本文の補足説明

数の表記：2進数 ... xxxxまたはxxxxB

10進数 ... xxxx

16進数 ... xxxxH

2のべき数を示す接頭語（アドレス空間，メモリ容量）：

K（キロ）...  $2^{10} = 1024$

M（メガ）...  $2^{20} = 1024^2$

G（ギガ）...  $2^{30} = 1024^3$



**関連資料** 関連資料は暫定版の場合がありますが、この資料では「暫定」の表示をしておりません。あらかじめご了承ください。

**ヒューマン・マシン/Ｆデモ・ボード，漢字表示デモ・ボードの関連資料**

| 資料名  | 資料番号    |    |
|--|---------|----|
|  | 和文      | 英文 |
| ヒューマン・マシン/Ｆデモ用ベース・ボード ユーザーズ・マニュアル            | U20117J | 未定 |
| ヒューマン・マシン/Ｆデモ用78K0ボード ユーザーズ・マニュアル            | U20118J | 未定 |
| ヒューマン・マシン/Ｆデモ用78K0Rボード ユーザーズ・マニュアル           | U20119J | 未定 |
| ヒューマン・マシン/Ｆデモ用V850ESボード ユーザーズ・マニュアル          | U20120J | 未定 |
| 漢字表示デモンストレーション用ベース・ボード ユーザーズ・マニュアル           | U19207J | 未定 |
| 漢字表示デモンストレーション用78K0/KF2ボード ユーザーズ・マニュアル       | U19208J | 未定 |
| 漢字表示デモンストレーション用78K0R/KG3ボード ユーザーズ・マニュアル      | U19209J | 未定 |
| 漢字表示デモンストレーション用V850ES/JG3ボード ユーザーズ・マニュアル     | U19210J | 未定 |
| 78K0/Kx2サンプル・プログラム（簡易OS編）アプリケーション・ノート        | U19214J | 未定 |
| 78K0R/Kx3サンプル・プログラム（簡易OS編）アプリケーション・ノート       | U19215J | 未定 |
| V850ES/Jx3サンプル・プログラム（簡易OS編）アプリケーション・ノート      | U19216J | 未定 |
| フォント・ユーティリティ ユーザーズ・マニュアル                     | U19527J | 未定 |
| 78K0/Kx2 サンプル・プログラム（フォント選択編）アプリケーション・ノート     | U19528J | 未定 |
| 78K0R/Kx3 サンプル・プログラム（フォント選択編）アプリケーション・ノート    | U19529J | 未定 |
| V850ES/Jx3 サンプル・プログラム（フォント選択編）アプリケーション・ノート   | U19530J | 未定 |
| 漢字表示デモンストレーション用拡張ボード ユーザーズ・マニュアル             | U19526J | 未定 |
| 78K0/Kx2 サンプル・プログラム（ドットLCD制御編）アプリケーション・ノート   | U19531J | 未定 |
| 78K0R/Kx3 サンプル・プログラム（ドットLCD制御編）アプリケーション・ノート  | U19532J | 未定 |
| V850ES/Jx3 サンプル・プログラム（ドットLCD制御編）アプリケーション・ノート | U19533J | 未定 |
| V850ES/Jx3 サンプル・プログラム（タッチスクリーン編）アプリケーション・ノート | U19722J | 未定 |
| 78K0/Kx2 サンプル・プログラム（コーデック接続編）アプリケーション・ノート    | U19723J | 未定 |
| 78K0R/Kx3 サンプル・プログラム（コーデック接続編）アプリケーション・ノート   | U19724J | 未定 |
| V850ES サンプル・プログラム（コーデック接続編）アプリケーション・ノート      | このノート   | 未定 |

**V850ESマイクロコントローラ・デバイスの関連資料**

| 資料名  | 資料番号    |         |
|--|---------|---------|
|  | 和文      | 英文      |
| V850ES ユーザーズ・マニュアル アーキテクチャ編                                | U15943J | U15943E |
| V850ES/JG3 ユーザーズ・マニュアル                                     | U18708J | U18708E |
| V850ES/JJ3 ユーザーズ・マニュアル                                     | U18376J | U18376E |
| V850ES/JF3-L ユーザーズ・マニュアル                                   | U18952J | U18952E |
| V850ES/JG3-L ユーザーズ・マニュアル                                   | U18953J | U18953E |
| V850ES/HE3, V850ES/HF3, V850ES/HG3, V850ES/HJ3 ユーザーズ・マニュアル | U18854J | U18854E |

**注意** 上記関連資料は予告なしに内容を変更することがあります。設計などには、必ず最新の資料をご使用ください。

# 目 次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| <b>第1章 概 説</b> ...                 | 10 |
| 1.1 <b>プログラム概要</b> ...             | 10 |
| 1.2 <b>開発環境</b> ...                | 10 |
| 1.2.1 <b>ソフトウェア・ツール</b> ...        | 10 |
| 1.2.2 <b>評価ボード</b> ...             | 11 |
| 1.3 <b>アプリケーションの依存情報</b> ...       | 12 |
| <b>第2章 オーディオ・コーデック接続方式</b> ...     | 13 |
| 2.1 <b>インタフェースの概要</b> ...          | 13 |
| 2.1.1 <b>マスタ・クロック供給</b> ...        | 13 |
| 2.1.2 <b>制御インタフェース</b> ...         | 13 |
| 2.1.3 <b>オーディオ・データ・インタフェース</b> ... | 14 |
| 2.2 <b>接 続 例</b> ...               | 15 |
| 2.2.1 <b>クロック供給とPLL設定</b> ...      | 15 |
| 2.2.2 <b>制御インタフェースの方式選択</b> ...    | 15 |
| 2.2.3 <b>オーディオ・データの入出力制御</b> ...   | 16 |
| <b>第3章 アプリケーション実装例</b> ...         | 18 |
| 3.1 <b>アプリケーションの概要</b> ...         | 18 |
| 3.1.1 <b>機能概要</b> ...              | 18 |
| 3.1.2 <b>制御手順の概要</b> ...           | 19 |
| 3.1.3 <b>主要な変数・定数・定義値</b> ...      | 19 |
| 3.2 <b>初期化</b> ...                 | 20 |
| 3.3 <b>主 処 理</b> ...               | 23 |
| 3.4 <b>ADPCMデータ伸長関数</b> ...        | 29 |
| 3.5 <b>フレーム同期とシリアル転送処理</b> ...     | 29 |
| 3.6 <b>終了処理</b> ...                | 31 |

## 第4章 サンプル・アプリケーションのビルド方法 ... 33

- 4.1 フォルダ構成 ... 33
- 4.2 実行モジュールの作成 ... 34
  - 4.2.1 プロジェクト・ファイルによるビルド ... 34
  - 4.2.2 プロジェクト・ファイルの新規作成 ... 35

## 第5章 サンプル・アプリケーションの実行方法 ... 37

- 5.1 プログラムの書き込みと起動方法 ... 37
  - 5.1.1 デバッガで起動する場合 ... 37
  - 5.1.2 プログラマで書き込んで起動する場合 ... 38
- 5.2 ターミナル・ソフトウェアの操作について ... 39
- 5.3 コマンドの書式 ... 40
- 5.4 コマンド例 ... 41

# 第1章 概 説

この資料では、V850ES用オーディオ・コーデック接続サンプル・プログラムについて説明します。

## 1.1 プログラム概要

本サンプル・プログラムは、音声データやBEEP波形データをオーディオ・コーデックへ送る処理を行います。オーディオ・データ・インタフェースとしてはDSPモードを使用し、クロックや同期信号はコーデックからもらう方法で接続しています。オーディオ・データ・インタフェース方式がI<sup>2</sup>Sモードで、MCU内部でクロックや同期信号を生成する場合は、次の資料を参考にしてください。

「78K0R/Kx3サンプル・プログラム I<sup>2</sup>Sバス・インタフェース (U19514)」

## 1.2 開発環境

サンプル・プログラムからオブジェクト・コードを生成するソフトウェア・ツールと、生成したコードを実行する評価ボードについて説明します。

### 1.2.1 ソフトウェア・ツール

本サンプル・プログラムのビルドに推奨するソフトウェア・ツールは、NECエレクトロニクス製の有償ソフトウェア・パッケージ (SP850) です。

#### (1) 推奨バージョン

ソフトウェア・ツールの推奨バージョンです。

(a) CA850 : 3.20以上

#### (2) 無償ダウンロード版の制約

無償ダウンロード版のコンパイラおよびアセンブラ (CA850) には生成できるオブジェクト・サイズに制限があり、音声データ・サイズが限られます。

## 1.2.2 評価ボード

実際に音を出して評価するために、下記(1)または(2)のボードを使用できます。

ボードの入手に関する情報については、下記のURLを参照してください。

<http://www.necel.com/micro/ja/designsupports/board/index.html>

### (1) ヒューマン・マシンI/Fデモ用ボード

- ・ヒューマン・マシンI/Fデモ用ベース・ボード (SM07A)
- ・ヒューマン・マシンI/Fデモ用V850ESボード (SM07L)

### (2) 漢字表示デモンストレーション用ボード

- ・漢字表示デモンストレーション用ベース・ボード (SM05A2)
- ・漢字表示デモンストレーション用V850ESボード (SM05K2)
- ・漢字表示デモンストレーション用拡張ボード (SM06B2)

### (3) プログラム書き込みツール

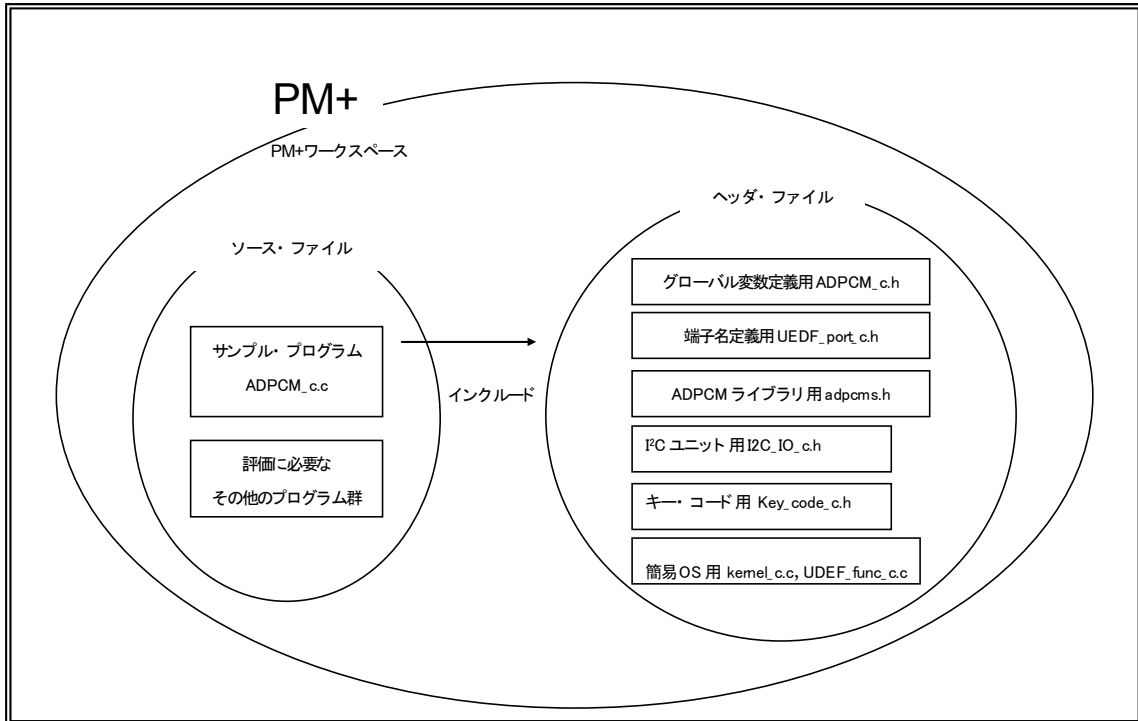
推奨するプログラム書き込みツールは、オンチップ・デバッグ・エミュレータ (QB-MINI2) です。

PG-FP5などのフラッシュ・メモリ・プログラマ (以降、プログラマ) でも可能です。

### 1.3 アプリケーションの依存情報

プロジェクト・マネージャ（以降，PM+）環境下での依存情報を次の図に示します。

図1 - 1 PM+環境下での依存情報の関係



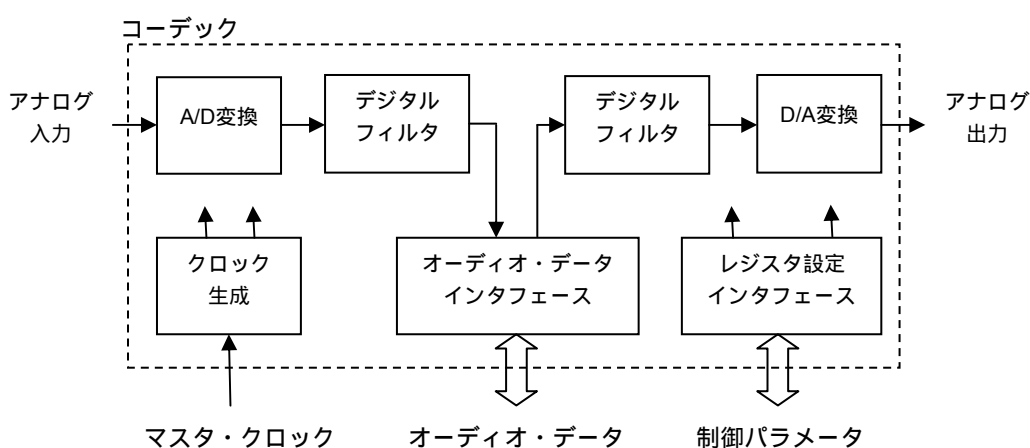
## 第2章 オーディオ・コーデック接続方式

この章では、コーデックのインタフェース全般を概説し、サンプル・プログラムで対応しているインタフェースについて詳細に説明します。

### 2.1 インタフェースの概要

マイクロコントローラにオーディオ・コーデックを接続する場合、大きく分けて次の3点を考慮します。

- ・コーデックへのマスタ・クロック供給
- ・コーデックの各種制御パラメータ（レジスタ）の設定インタフェース
- ・オーディオ・データ・インタフェース



#### 2.1.1 マスタ・クロック供給

コーデック内部のA/D変換、D/A変換、デジタル・フィルタはサンプリング周波数あるいはその整数倍で動作します。例えば、8kHzサンプリングの256倍が必要であれば2.048MHzが必要になります。このクロックをマイクロコントローラで直接生成できる場合は良いのですが、一般的には異なることが多いため、最近はコーデックにPLLを搭載して異なる周波数からクロック生成できるものが増えてきました。

PLL搭載タイプのコーデックでも、何種類かの周波数から選択するものと、ある範囲の任意の周波数を入力できるものに分かれます。後者は若干パラメータ計算の手間はかかりますが、1回計算するだけなので、一般的には後者のタイプの方が便利でしょう。

#### 2.1.2 制御インタフェース

コーデックの動作開始/停止やフィルタ特性、ボリューム調整などは、コーデック内のレジスタに制御パラメータを書き込むことにより行います。

インタフェースの種類としては、3線シリアルやI<sup>2</sup>Cバスなどが用いられます。マイクロコントローラから送るデータは、レジスタ・アドレスとその設定データになります。レジスタの種類とその内容はコーデックにより異なります。

### 2.1.3 オーディオ・データ・インタフェース

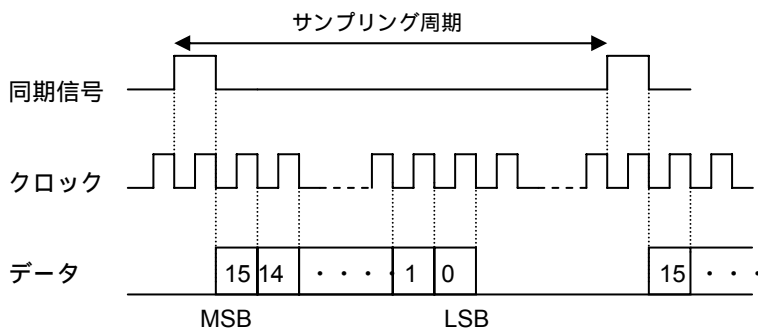
コーデックにより特定のインタフェースのみ対応したものと、複数のインタフェースに対応したものがあります。主な違いは、同期信号の波形形状と、同期信号のエッジからオーディオ・データまでの位置（クロック数）です。

- ・ DSP (PCM) モード
- ・ I<sup>2</sup>Sフォーマット
- ・ 右詰め, 左詰めフォーマット
- ・ AC'97

以下、最初の二つについてタイミングを示します。

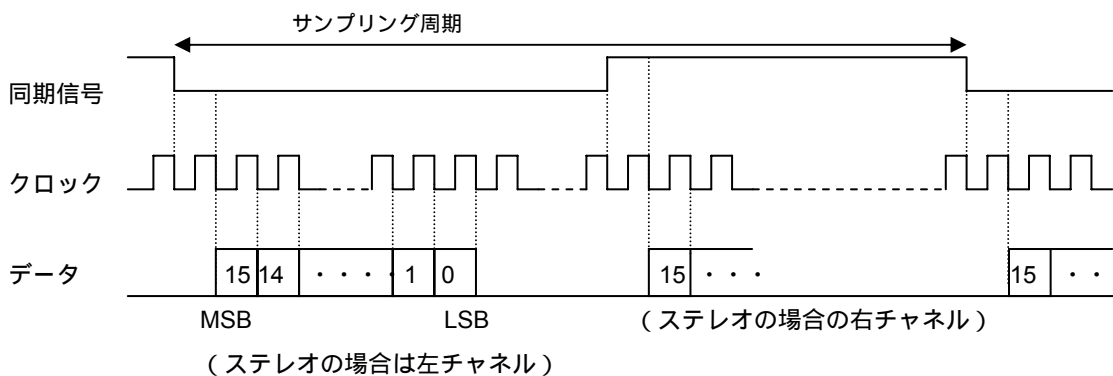
#### (1) DSP (PCM) モード

- ・ フレーム同期信号（サンプリング・レート同期）として、ビット・クロックの1クロック分だけの細かいパルス波形になります。
- ・ オーディオ・データの位置は、フレーム同期信号の次のビット・クロックからになります。



#### (2) I<sup>2</sup>Sフォーマット

- ・ フレーム同期信号は、サンプリング周期を1周期とする方形波になります。
- ・ オーディオ・データの位置は、エッジから2クロック目からになります。





## 2.2 接続例

ここでは、スピーカ・アンプを内蔵しているWolfson製モノラル・コーデックWM8974と接続する場合を例として説明します。

### 2.2.1 クロック供給とPLL設定

WM8974はマスタ・クロックの周波数を比較的自由に選ぶことが出来ます。このため、V850ESのクロック出力（CLKOUT端子からの出力）をマスタ・クロックとして入力できます（7.562～32.768 MHzの範囲）。

WM8974のPLL関連レジスタには、マスタ・クロックの周波数に対応する値を設定する必要があります。以下、簡易な計算方法を示します。

$98.304 / \text{CLKOUT出力周波数 (MHz単位)} = \text{除算結果 (整数部.小数部)}$

ただし、結果の整数部が5以下の場合は、 $196.608 / \text{CLKOUT出力周波数}$ 、とし、除算結果の整数部に16を加算した値を最終的な除算結果整数部とします。

除算結果の小数部  $\times 16,777,216 = \text{PLLK設定値 (小数部を切り捨てて、24ビットの2進数で表す)}$

コーデックのレジスタ番号36～39設定値は、次のとおり（注：一つの番号で9ビットを設定）。

36：上位4ビットは0000，下位5ビットに除算結果の整数部を格納

37：上位3ビットは000，下位6ビットにPLLKの上位6ビットを格納

38：PLLKの中9ビットを格納

39：PLLKの下位9ビットを格納

これにより、コーデックのPLL出力周波数（ $f_{\text{PLLOUT}}$ ）は24.576 MHzとなり、後段の分周器の設定により48 kHzおよびその分周周波数でのサンプリング・レートに対応できるようになります。

代表的なCLKOUT周波数に対する計算値を下表に示します。

| CLKOUT周波数 [ MHz ] | 設定内容   |
|-------------------|--|
| 8                 | 整数部 = 01100, PLLK = 010010 011011101 001011110 |
| 10                | 整数部 = 01001, PLLK = 110101 001001010 100011000 |
| 16                | 整数部 = 00110, PLLK = 001001 001101110 100101111 |
| 20                | 整数部 = 11001, PLLK = 110101 001001010 100011000 |
| 32                | 整数部 = 10110, PLLK = 001001 001101110 100101111 |

### 2.2.2 制御インタフェースの方式選択

WM8974は、 $I^2C$ バス・インタフェースあるいは3線シリアル・インタフェースで使用できます。どちらのインタフェースで使用するかは、コーデックのMODEピンで選択できます。後述のサンプル・プログラムでは $I^2C$ バスを使用します。

・MODEピン = 'L'： $I^2C$ バス

・MODEピン = 'H'：3線シリアル（データ、クロック、ストローク）

$I^2C$ バスの場合は、1バイト目に $I^2C$ アドレス0011010+リ・ド/ライト指定，2バイト目にレジスタ番号7ビット+設定データMSB，3バイト目に設定データ下位8ビットを転送します。

3線シリアルの場合は、レジスタ番号7ビット+設定データ9ビットの合計16ビット単位で転送します。

### 2.2.3 オーディオ・データの入出力制御

データやインタフェースの条件を次のとおりとします。

- ・音声データ：8 kHzサンプリング，16ビット・データ（リニアPCMデータ）。
- ・インタフェース形式：DSPモード
- ・フレーム同期信号，ビット・クロック信号はコーデック側から供給。V850ES側は，割り込み検出端子（フレーム同期信号用），3線シリアル・インタフェース（スレーブ・モード）を使用。

#### (1) コーデックの設定

レジスタ番号4：000011000 （16ビット・データ，DSPモード）

レジスタ番号6：111101101 （PLL出力を12分周，ビット・クロックはさらに8分周，

フレーム同期信号とビット・クロック信号をコーデックから出力）

ここで，PLL出力は2.2.1項の設定により24.576 MHz，必要クロックはサンプリング周波数の256倍 = 8 kHz × 256 = 2.048 MHzであるため，12分周を行います。

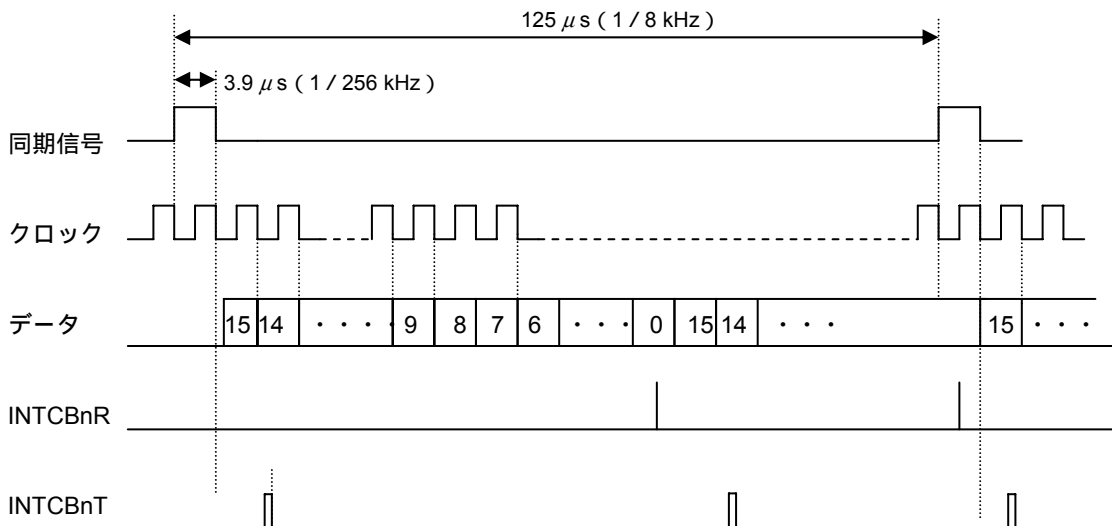
また，1フレームのビット・クロック数を32ビットとすると，256 / 32 = 8から，ビット・クロック生成用分周器を8に設定します。

レジスタ番号7：000001010 （デジタル・フィルタの係数を8 kHzサンプリング用に設定）

#### (2) タイミング

V850ESの3線シリアルI/Oを通信タイプ4，スレーブ，連続転送，16ビット長に設定します。

フレーム周波数8 kHz，ビット・クロック周波数256 kHzより，タイミングは次のようになります。



同期信号の立ち上がりで割り込み処理に入ります。

同期信号の立ち下がり検出で1ワード目のデータ送信を開始します。フレーム割り込みは禁止し，代わりにシリアル・インタフェースの割り込みを許可します。

送信の場合すぐにINTCBnT割り込みがかかるのでダミー・データを書き込みます。以降，音声データ1ワード（16ビット）とダミー・データ1ワード（16ビット）を交互に送信します。

受信データ1ワード目は，ここで読み出せます。以降，ダミー・データ1ワード（16ビット）と音声データ1ワード（16ビット）を交互に受信します。

### (3) プログラミング上の考慮点

他のプログラムと同時に動作させるにはいくつか考慮すべき点があります。

#### フレーム同期

フレーム同期信号の立ち下がりでシリアル・インタフェースを確実にスタートさせるには、同期信号の立ち上がりで割り込みに入り、立ち下がりを待つのが良いでしょう。それでも‘H’レベル幅が $3.9 \mu\text{s}$ と短いため、他の割り込みは多重割り込み許可に設定し、フレーム同期の割り込み優先度を上げておきます。

CPUクロック周波数が低い場合（おおむね16MHz以下）は、C言語記述では上記処置を行っても間に合わない場合があります（退避するレジスタ数が多い場合）。このような場合は、アセンブラ記述で最低限のレジスタを退避するか、コンパイラで使用しない専用のレジスタを割り当てることにより退避を行わないようにします。

#### シリアル・インタフェースの連続転送

平均 $62.5 \mu\text{s}$ 周期でアクセスが必要です。全体の処理構成によっては、他の割り込みを多重割り込み許可に設定し、シリアル・インタフェースの割り込みの優先度を上げる必要があります。DMAを使う場合も転送終了割り込みの優先度を同様に上げる必要がある場合があります。

#### シリアル・インタフェースの転送が間に合わない場合

他の重要な割り込みの影響で転送が間に合わない場合は、ダミー・データ転送はやめて、フレーム同期を常に有効にし、フレーム同期ごとに1ワード（16ビット）転送するようにします。転送が間に合わなかった部分でノイズが生じますが、致命的な破綻は避けられます。

# 第3章 アプリケーション実装例

この章では、ADPCM再生サンプル・プログラムADPCM\_c.cを例にコーデック接続について説明します。

## 3.1 アプリケーションの概要

### 3.1.1 機能概要

サンプル・プログラムADPCM\_c.c は、ROMに格納された圧縮音声データを伸長し、コーデックへ送信するプログラムです。BEEP用のPCM波形データを直接送る機能もあります。

機能概要を図3-1に示します。アプリケーション全体としては簡易OSやI<sup>2</sup>Cバス制御プログラムが含まれていますが、ADPCM\_c.c以外の説明は省略します。

図3-1 機能概要図

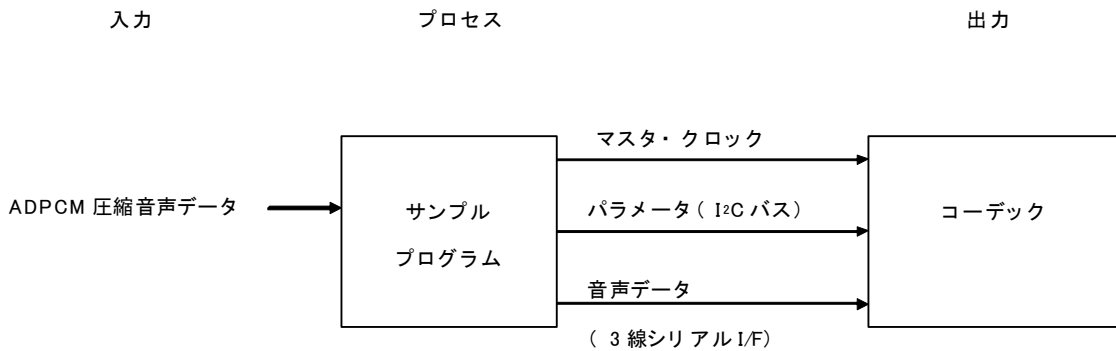
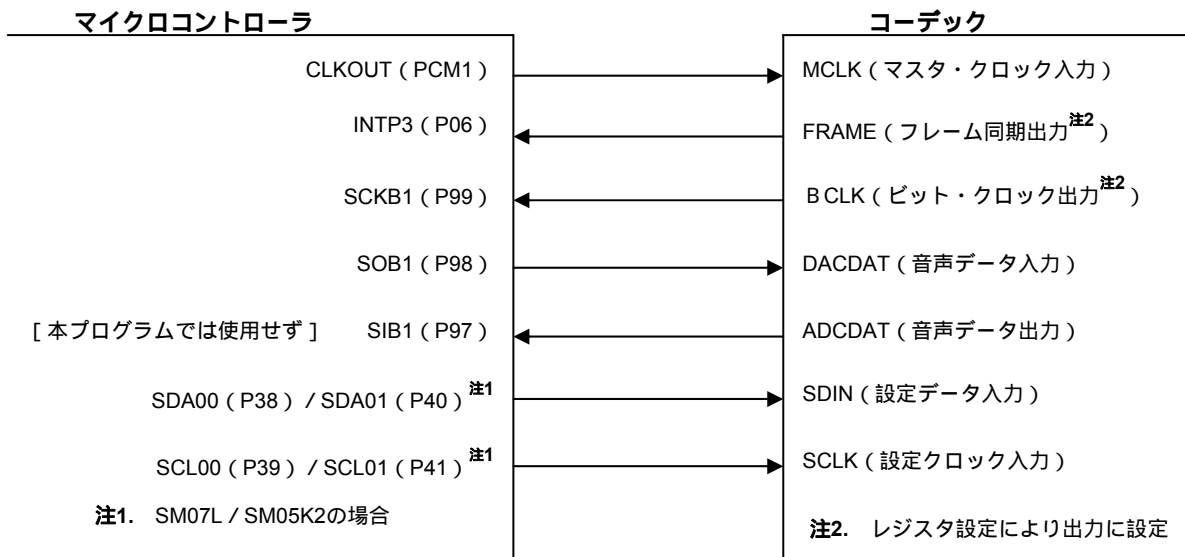


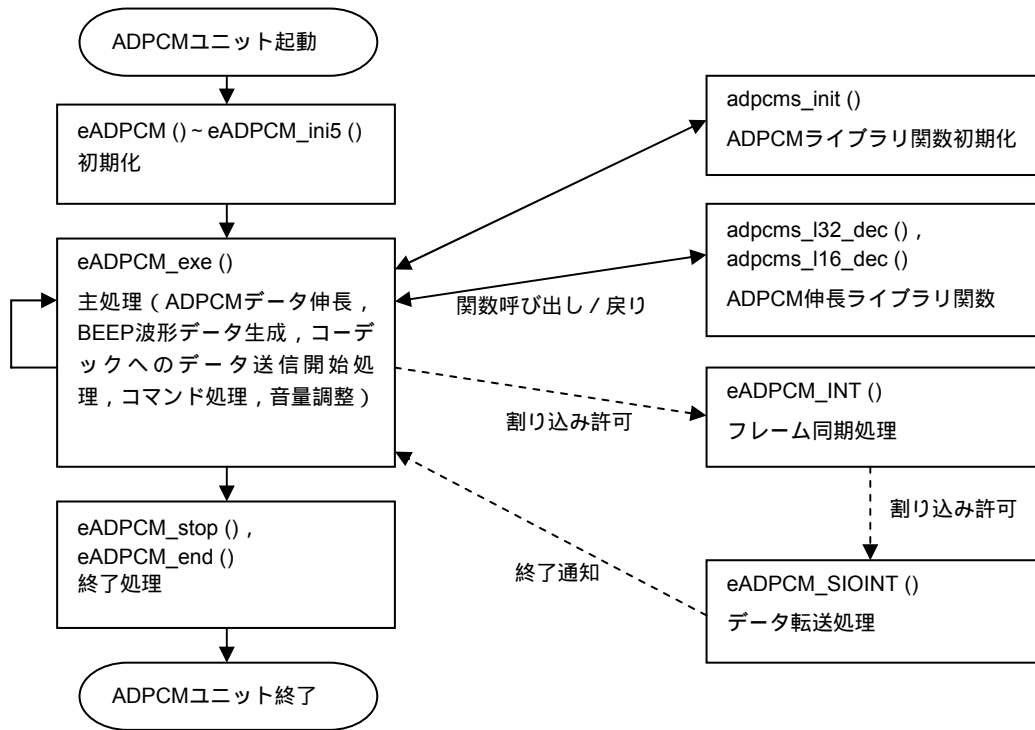
図3-2 接続図



### 3.1.2 制御手順の概要

ADPCM\_c.c中の主要な関数の流れを図3-3に示します。本ソース・プログラムには、簡易OS依存部が多少含まれますが、簡易OSを使わない場合の修正方法がコメントに記載されています。

図3-3 全体フローチャート



### 3.1.3 主要な変数・定数・定義値

#### (1) 音声データ, BEEP波形データ

const unsigned long tiADPCM\_data[] 音声データの開始アドレスへのポインタを格納  
 const unsigned char tcADPCM\_mode[] 各音声データの圧縮形式  
 const short tiADPCM\_table[] BEEP波形データ (正弦波1周期分)

#### (2) コーデック制御パラメータ, データ送信バッファ制御

const unsigned char tcADPCM\_init[] コーデックの初期化データ  
 const unsigned char tcADPCM\_close[] コーデック使用終了時に送付するデータ (ミュート用)  
 unsigned short tiADPCM\_fifo[] コーデックへ送る音声データのバッファ  
 extern unsigned char tcADPCM\_rc 音声データ・バッファのリード・カウンタ  
 extern unsigned char tcADPCM\_wc 音声データ・バッファのライト・カウンタ

#### (3) ホスト・マシンとのコマンド・インタフェース, プログラム動作パラメータ

struct ADPCM\_REG gADPCM コマンド受け取り変数およびパラメータ変数の構造体

#### (4) ポート定義, SFR定義

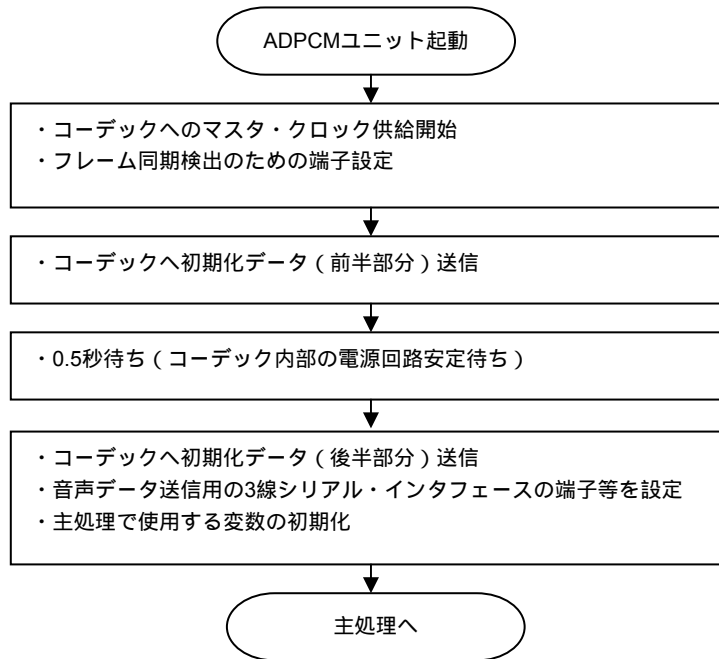
UDEF\_port\_c.hを参照してください。

## 3.2 初期化

コーデックの初期化および主処理で使用する変数の初期化をeADPCM ~ eADPCM\_ini5までの5つの関数で行います。

### (1) 概略フロー

図3 - 4 初期化の概略フローチャート



## (2) 初期化のプログラム・リスト

```

void eADPCM(void) {
    /* 資源フラグ初期化 */
    #if ADPCM_SP > 0
        tbADPCM_CSI = 0;
    #endif

    /* I2C資源確認 */
    if (!(vRefer_task(hI2C_IO) & TASK_ACTIVE)) {
        if (!(vRefer_task(hI2C_IO) & TASK_START)) {
            vStart_task(hI2C_IO, eI2C_IO);
        }
        return;
    }
    /* I2C_IO ロック */
    glI2C_IO.adpcm = 1;

    /* 端子設定 */
    #if ADPCM_SP > 0
        zmcPCL = 1;
        zmPCL = 0;
        zmcFRAME = 1;
        yFRAME_INTR = 1; /* 立ち上がり検出 */
        yFRAME_PIC = 0x42; /* IF=0, MK=1, 優先度2 */
    #endif

    /* コーデック初期設定(前半)の準備 */
    tcADPCM_wk = 0;
    vTrans_task(eADPCM_ini2); /* 簡易OSを使用しない場合は */
    } /* この部分を削除して */
    void eADPCM_ini2(void) { /* ループ文等で初期化します */
        /* コーデック初期設定(前半) */
        ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, tcADPCM_init[tcADPCM_wk], tcADPCM_init[tcADPCM_wk+1]);
        tcADPCM_wk += 2;
        if (tcADPCM_wk < nCODEC_OPEN1) return;

        /* コーデック内部電源安定待ちの準備 */
        tcADPCM_wk = (unsigned char) vGet_time();
        vTrans_task_delay(eADPCM_ini3); /* 簡易OSを使用しない場合は */
    } /* この部分を削除して */
    void eADPCM_ini3(void) { /* ループ文等で待ちます */
        unsigned char i;

        /* コーデック内部電源安定待ち */
        i = (unsigned char) vGet_time();
        i -= tcADPCM_wk;
        if (i < kCODEC_POW_wait) { vDelay_task(); }

        /* コーデック初期設定(後半)の準備 */
        tcADPCM_wk = nCODEC_OPEN1;
        vTrans_task(eADPCM_ini4); /* 簡易OSを使用しない場合は */
    } /* この部分を削除して */
    void eADPCM_ini4(void) { /* ループ文等で初期化します */
        /* コーデック初期設定(後半) */
        ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, tcADPCM_init[tcADPCM_wk], tcADPCM_init[tcADPCM_wk+1]);
        tcADPCM_wk += 2;
        if (tcADPCM_wk < nCODEC_OPEN2) return;
        ul2C_IO_stop();

        tcADPCM_vol = CODEC_VOLINI;
        tcADPCM_aux = CODEC_AUXINI;
    }
}

```

```

#if ADPCM_SP > 0
vTrans_task(eADPCM_ini5); /* 簡易OSを使用しない場合は */
} /* この部分を削除して */
void eADPCM_ini5(void) { /* 資源確保します */
/* CSI資源確保 */
if (luSAU0_chn_open(yCSI_sem)) return;

/* 資源フラグ・セット */
tbADPCM_CSI = 1;

/* ポート、レジスタ設定 */
yCSI_CTL1 = kCB1CTL1;
yCSI_CTL2 = kCB1CTL2;
yCSI_TIC = 0x47; /* CBnTIF=0, CBnTMK=1, 優先度7 */
zfcCSI_SCK = 1;
zmcCSI_SCK = 1;
zfcCSI_SI = 1;
zfceCSI_SI = 0;
zmcCSI_SI = 1;
zfcCSI_SO = 1;
zmcCSI_SO = 1;

/* 変数初期化 */
#if ADPCM_SP > 0
tbADPCM_start = 0; /* 開始フラグ */
tbADPCM_playb = 0; /* beep動作 */
tbADPCM_playbe = 0; /* beep終了 */
tbADPCM_endm = 0; /* 再生終了通知フラグ */
#endif

#if ADPCM_SP >= 10
tbADPCM_play32 = 0; /* 32kbps */
tbADPCM_play16 = 0; /* 16kbps */
#endif

#endif
vActive_task(hADPCM);
vTrans_task(eADPCM_exe); /* 簡易OSを使用しない場合はreturn文にします */
}

```

### (3) 詳細説明

I<sup>2</sup>Cバス制御を行うI2C\_IOユニットが起動していなければ起動します。

V850ESのCLKOUT端子からマスタ・クロックを出力します。使用するデモ・ボードとCPUクロック設定に応じて8~32 MHz出力になります。

tcADPCM\_init[]に格納されたコーデック初期化データを送信します。送信にはI2C\_IOユニットで定義している関数を使用しています。初期化データは、前半部分をまず送信します。

0.5秒のウェイトを行います。ここでは簡易OSでサポートされているシステム・タイマの読み取り関数を使用して経過時間を判定しています。簡易OSを使用しない場合は、システム・タイマを直接読むなどして経過時間を判定します。

tcADPCM\_init[]に格納された残りのコーデック初期化データを送信します。

コーデックに初期値として送ったボリューム値を音量管理変数にも格納します。

音声データを送るための3線シリアル・インタフェースの共有制御をしています。共有制御が不要であれば削除可能です。

3線シリアル・インタフェースの端子設定、レジスタ設定を行います。

ポート名やレジスタ名は、UDEF\_port\_c.hで定義しています。

主処理で使用する管理変数の初期化を行います。

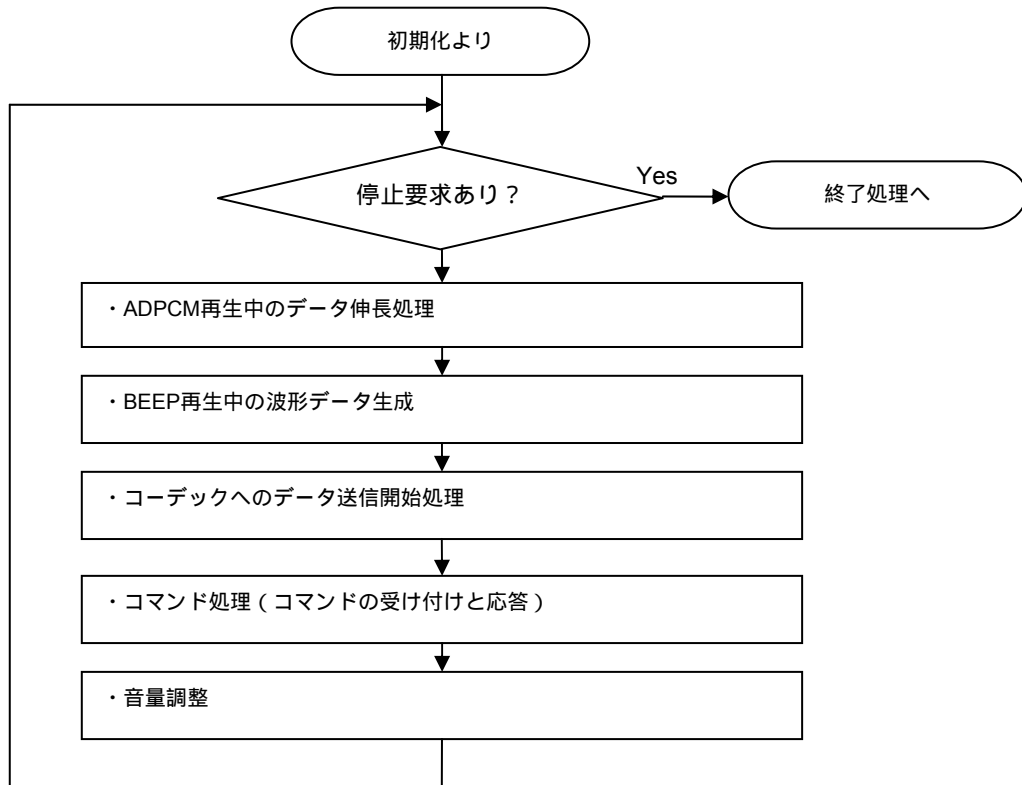


### 3.3 主処理

主処理では、ADPCM音声再生またはBEEP再生の開始 / 停止制御、ADPCMデータ伸長、BEEP波形データ生成、コマンド処理、キー操作による音量制御を行います。

#### (1) 概略フロー

図3 - 5 主処理の概略フローチャート



(2) 主処理のプログラム・リスト

```

void eADPCM_exe(void) {
    unsigned char *p, i,j,k;
    short m;
    unsigned long n;
    /* 停止処理判定 */
    if (!(vRefer_task(hADPCM) & TASK_ACTIVE)) {          /* 簡易OSを使用しない場合は、 */
        vTrans_task(eADPCM_stop);                        /* 削除します */
    }
    /*****
    ADPCMデータ伸長
    *****/
    #if ADPCM_SP >= 10
        if (tbADPCM_play32 || tbADPCM_play16) {
            if ((n = (unsigned long)tpADPCM_lim - (unsigned long)tpADPCM_data) > 0) {
                /* ADPCMデータ伸長 */
                j = (tcADPCM_rc - tcADPCM_wc - 1);        /* バッファ空き容量計算 */

                if (tbADPCM_play32) {
                    /* 32kbps ADPCM */
                    if (n > 127) n = 127;
                    k = (unsigned char)n << 1;
                    if (j > k) j = k;
                    j &= 0xfe;                            /* 2データ単位のデコード */
                    while (j) {
                        k = *tpADPCM_data++;
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l32_dec(k & 0x0f);
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l32_dec(k >> 4);
                        j -- 2;
                    }
                }
                else {
                    /* 16kbps ADPCM */
                    if (n > 63) n = 63;
                    k = (unsigned char)n << 2;
                    if (j > k) j = k;
                    j &= 0xfc;                            /* 4データ単位のデコード */
                    while (j) {
                        k = *tpADPCM_data++;
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l16_dec(k & 0x03);
                        k >>= 2;
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l16_dec(k & 0x03);
                        k >>= 2;
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l16_dec(k & 0x03);
                        k >>= 2;
                        tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = adpcms_l16_dec(k & 0x03);
                        k >>= 2;
                        j -- 4;
                    }
                }
            }
        }
        else {
            /* 1回の再生終了 */
            if (tcADPCM_rcnt != 0) {
                /* 繰り返し再生処理 */
                tiADPCM_t = 0;
                tpADPCM_data = *(unsigned char**)tiADPCM_data[tcADPCM_num];
            }
            else if (!gADPCM.status) {
                /* 再生完了 */
                tbADPCM_playbe = 1; /* 最終データのバッファ格納フラグ・セット */
                tbADPCM_endf = 0; /* 最終データの送信終了フラグ・クリア */
                tbADPCM_play32 = 0;
                tbADPCM_play16 = 0;
            }
        }
    }
}
#endif

```

```

/*****
BEEP波形生成
*****/
#if ADPCM_SP > 0
    /* Beep */
    if (tbADPCM_playb) {
        if ((n = (unsigned long)tpADPCM_lim - (unsigned long)tpADPCM_data) > 0) {
            j = (tcADPCM_rc - tcADPCM_wc - 1); /* バッファ空き容量計算 */
            if (n > 255) n = 255;
            k = (unsigned char)n;
            if (j > k) j = k;
            while (j) {
                tpADPCM_data++;
                tiADPCM_bt += gADPCM.delta;
                k=(unsigned char)(tiADPCM_bt >> 9);/**/
                tiADPCM_fifo[tcADPCM_wc++] = tiADPCM_table[k];
                j--;
            }
        }
        else {
            tbADPCM_playbe = 1; /* 最終データのバッファ格納フラグ・セット */
            tbADPCM_endf = 0; /* 最終データの送信終了フラグ・クリア */
            tbADPCM_playb = 0;
        }
    }
}
/*****
コーデックへのデータ送信開始
*****/
if (tbADPCM_start) {
    tcADPCM_tcmt = 1; /* 転送ワード・カウンタの初期設定 */
    yCSI_CTL0 = kCB1CTL0_tr; /* シリアル・インタフェースの設定 */
    yFRAME_PIC = 0x02; /* フレーム同期割り込みマスクの解除, 優先度2 */
    tbADPCM_start = 0; /* 開始要求フラグをリセット */
}
/*****
再生終了判定
*****/
if (tbADPCM_playbe && tbADPCM_endf || gADPCM.cmd == 'e') {
    if (gADPCM.cmd == 'e') gADPCM.status = 'o';
    else tbADPCM_endm = 1;

    yFRAME_PIC = 0x42; /* フレーム同期割り込みをマスク */
    yCSI_TIC = 0x47; /* シリアル・インタフェース割り込みをマスク */
    yCSI_CTL0 = kCB1CTL0_st; /* シリアル・インタフェースを停止 */
    tbADPCM_playbe = 0;
    tbADPCM_playb = 0;
    #if ADPCM_SP >= 10
        tbADPCM_play32 = 0;
        tbADPCM_play16 = 0;
    #endif
}

/* 終了通知 */
if (tbADPCM_endm && !gADPCM.status) {
    tbADPCM_endm = 0;
    gADPCM.status = '!';
}
}
#endif
/*****
コマンドの処理
*****/
/** コマンド応答 */
if (gADPCM.status) {
    /* 再生終了および応答メッセージの送信処理 */
    if (p = uUDEF_get_REG(gADPCM.req)) { /* メッセージ送付先バッファのアドレスを取得します */
        if (p != UDEF_REQ_ERROR) {
            *p++ = (unsigned char) hADPCM; /* ADPCMユニットからの返答であることを示します */
            if (gADPCM.status == '!') *p++ = 'F'; /* 再生終了を示します */
            else *p++ = gADPCM.cmd; /* ホスト・コマンドに対する応答の場合を示します */
            *p++ = 1; /* 1バイトのデータが続くことを示します */
            *p++ = gADPCM.status; /* ステータス記号 */
        }
    }
}

```

```

/** コマンド受付 */
else if (gADPCM.cmd) {
    gADPCM.status = 'o';          /* 成功ステータスを仮に入力。 */
    #if ADPCM_SP > 0
        if (gADPCM.cmd == 'b') {
            /* BEEP出力コマンド処理 */
            if (gADPCM.num < 1) gADPCM.status = 'p';
            else {
                tpADPCM_lim = (unsigned char *)((unsigned short)gADPCM.para1 * 80);
                if (!tbADPCM_playb && !tbADPCM_play16 && !tbADPCM_play32) {
                    tbADPCM_start = 1;
                    tcADPCM_rc = 0;
                    tcADPCM_wc = 0;
                }
                else {
                    tbADPCM_play16 = 0;
                    tbADPCM_play32 = 0;
                }
                if (gADPCM.EQ5) {
                    ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, 22*2+0, 0x2C);
                    ul2C_IO_stop();
                }
                tbADPCM_playb = 1;
                tbADPCM_playbe = 0;
                tpADPCM_data = 0;
                tiADPCM_bt = 0;
            }
        }
    #endif
    #if ADPCM_SP >= 10
        else if (gADPCM.cmd == 'p') {
            /* ADPCM再生コマンド処理 */
            if (gADPCM.num < 2 || gADPCM.para1 >= nADPCM_DATA) gADPCM.status = 'p';
            else {
                tcADPCM_num = gADPCM.para1;
                tcADPCM_rcnt = gADPCM.para2;
                tpADPCM_data = *(unsigned char**)tiADPCM_data[tcADPCM_num];
                tpADPCM_lim = tpADPCM_data + *(unsigned short*)tiADPCM_len[tcADPCM_num];

                if (!tbADPCM_playb && !tbADPCM_play16 && !tbADPCM_play32) {
                    tbADPCM_start = 1;
                    tcADPCM_rc = 0;
                    tcADPCM_wc = 0;
                }
                else {
                    tbADPCM_playb = 0;
                    tbADPCM_play16 = 0;
                    tbADPCM_play32 = 0;
                }

                adpcms_init();          /* ADPCM伸長ライブラリ関数初期化 */

                switch (tcADPCM_mode[tcADPCM_num]) {
                    case 1: tbADPCM_play16 = 1;
                        if (gADPCM.EQ5) {
                            ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, 22*2+0, 0x18);
                            ul2C_IO_stop();
                        }
                        break;
                    case 3: tbADPCM_play32 = 1;
                        if (gADPCM.EQ5) {
                            ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, 22*2+0, 0x2C);
                            ul2C_IO_stop();
                        }
                        break;
                    default: tbADPCM_start = 0; gADPCM.status = 'p';
                }
            }
        }
    #endif
}

```

```

#endif
        else
            gADPCM.status = 'c';
            return;
        }
    }
    /*****
    キー操作によるボリューム調整
    *****/
    #if Task_Key_code > 0
        if (gADPCM.vol_key) {
            if (gKey_code.code == 0x1c) {
                if (tcADPCM_vol <= CODEC_VOLLIM - CODEC_VOLSTP) {
                    tcADPCM_vol += CODEC_VOLSTP;
                    uI2C_IO_write(CODEC_ADDR, 54*2+0, tcADPCM_vol);
                }
                gKey_code.code = 0;
            }
            else if (gKey_code.code == 0x1d) {
                if (tcADPCM_vol >= CODEC_VOLSTP) {
                    tcADPCM_vol -= CODEC_VOLSTP;
                    uI2C_IO_write(CODEC_ADDR, 54*2+0, tcADPCM_vol);
                }
                gKey_code.code = 0;
            }
        }
        else if (gKey_code.code == '^' || gKey_code.code == ',') {
            if (tcADPCM_aux > 0) {
                tcADPCM_aux--;
                uI2C_IO_write(CODEC_ADDR, 47*2+0, tcADPCM_aux);
            }
            gKey_code.code = 0;
        }
        else if (gKey_code.code == '>' || gKey_code.code == '!') {
            if (tcADPCM_aux < CODEC_VOLLIM) {
                tcADPCM_aux++;
                uI2C_IO_write(CODEC_ADDR, 47*2+0, tcADPCM_aux);
            }
            gKey_code.code = 0;
        }
    }
}
#endif

/*****
処理の継続判定
*****/
#if ADPCM_SP > 0
    if (tbADPCM_playb || tbADPCM_play32 || tbADPCM_play16)
        return; /* 簡易OSを使用しない場合は、なるべく短い間隔で本関数を繰り返し呼び出します。*/
#endif
    vDelay_task(); /* 簡易OSを使用しない場合は、10ms間隔で本関数を呼び出します。*/
}

```

## (3) 詳細説明

ADPCMユニットの停止を判定します。簡易OSを使用しない場合は、本関数の呼び出しを停止して、終了関数の呼び出しを行います。

音声データ・バッファのリード・カウンタ/ライト・カウンタの差分から空き容量を計算します。なお、バッファはリング・バッファとして管理します。リード・カウンタ、ライト・カウンタは、0~255の範囲で巡回インクリメントします。

32kbps ADPCM (4ビットADPCM) で圧縮されているデータを、ライブラリ関数を使用して伸長します。圧縮コード1バイトにつき16ビットPCMデータ2つが復号できます。

16kbps ADPCM (2ビットADPCM) で圧縮されているデータを、ライブラリ関数を使用して伸長します。圧縮コード1バイトにつき16ビットPCMデータ4つが復号できます。

1つの圧縮データを複数回再生する場合の判定を行います。最終的に終了した場合は、終了フラグを立てます。

BEEP再生の場合、コマンド・パラメータで指定された経過時間を超えてなければ、波形データを音声バッファに格納します。

フレーム同期割り込みを許可します。

コーデックへのデータ送信終了(音声再生終了)した場合に、フレーム同期やシリアル・インタフェースを停止します。

再生終了のメッセージやコマンドに対する返信メッセージを送る処理です。共用関数を使用してコマンドの返信先バッファ・アドレスを取得し、所定の順序でメッセージを格納します。

BEEP再生コマンドがきたら、開始要求フラグを立てます。ただし、すでにコーデック動作中であれば、開始要求はせずに、BEEP波形データ生成の指示だけ行います。また、コーデックのイコライザの初期化を行います(音声再生のために変更されている場合があるため)。

音声再生コマンドが来た場合、再生すべきデータの位置や音声バッファのポインタを初期化します。音声再生を開始するための要求フラグを立てます。ただしコーデック動作中は、要求フラグを立てずに、BEEP波形生成やADPCM伸長の指示をいったん取り消します。

ADPCMライブラリ関数を使用して初期化を行います。また、音声データの圧縮タイプに応じたフラグを立てて、コーデックのイコライザ(高域カット・フィルタとして使用)を設定します。

キー・コードに応じて、音量アップまたは音量ダウンしたボリューム値をコーデックに設定します。

キー・コードに応じて、アナログ入力(方形波メロディのミキシング用)ボリュームの値をアップまたはダウンします。

再生中かどうかで、継続して本関数を呼び出すか、ある程度の間隔で呼び出すか(コマンドの判定用)を決めます。

### 3.4 ADPCMデータ伸長関数

本サンプル・プログラムに添付してあるADPCM伸長ライブラリは簡易版です。正式版の入手方法や差し替え方法、簡易版との違いについては、adpcms.hを参照してください。

パソコン上で圧縮データを作るためのツールも正規版と同時に申込みいただけます。

なお、圧縮データは、簡易版でもそのまま使用できます。

### 3.5 フレーム同期とシリアル転送処理

フレーム同期割り込みにより1ワード目（16ビット）の音声データをコーデックへ転送します。2ワード目以降はシリアル・インタフェースの割り込みにより転送します。

#### (1) 概略フロー

図3 - 6 フレーム同期割り込みの概略フローチャート

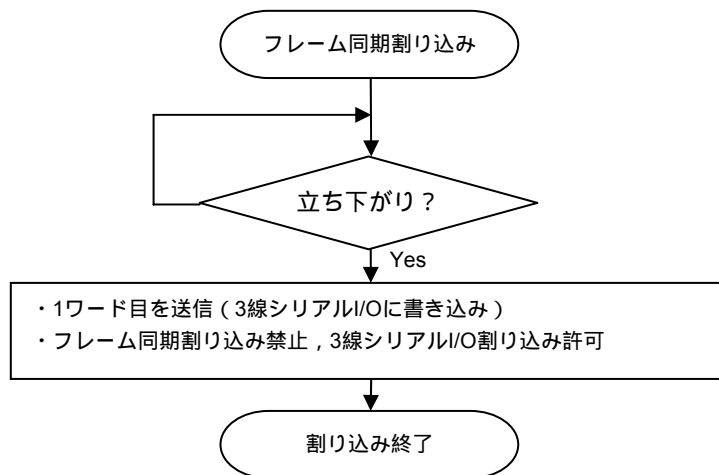
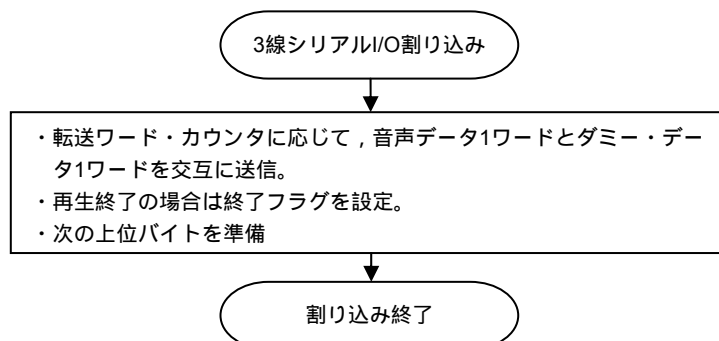


図3 - 7 バッファ空き割り込みの概略フローチャート



## (2) プログラム・リスト

```

/*****
 フレーム同期検出
 *****/
__interrupt
void eADPCM_INT(void) {
    if (!zFRAME) return; /* 同期信号確認*/

    /* シリアル・インタフェース割り込みマスク解除, 優先度2 */
    yCSI_TiC = 0x02;

    /* 同期信号立ち下がり待ち */
    while(zFRAME);

    /* 1ワード転送 */
    yCSI_TX = tiADPCM_fifo[tcADPCM_rc++];

    /* フレーム同期割り込みマスク */
    yFRAME_MK = 1;
}

/*****
 データ連続転送
 *****/
__interrupt
void eADPCM_SIOINT(void) {
    if (tcADPCM_tcnt++) {
        /* ダミー・データ送出 */
        yCSI_TX = 0;
        tcADPCM_tcnt = 0;
    }
    else {
        /* 音声データ送出 */
        yCSI_TX = tiADPCM_fifo[tcADPCM_rc++];

        /* バッファ空で再生終了 */
        if (tcADPCM_rc == tcADPCM_wc) {
            tbADPCM_endf = 1;
            yCSI_MK = 1;
        }
    }
}

```

## (3) 詳細説明

フレーム同期信号を確認します。‘H’ でなければ次の同期信号を待ちます。

シリアル・インタフェースの割り込みを有効にします。

フレーム同期が立ち下がったら、1ワード目を送信します。

フレーム同期割り込みを禁止にします。

転送ワード・カウンタをインクリメントし、音声データとダミー・データを交互に送信します。

音声データ・バッファのリード・カウンタとライト・カウンタが等しくなったら転送終了と判定して終了フラグを立てます。

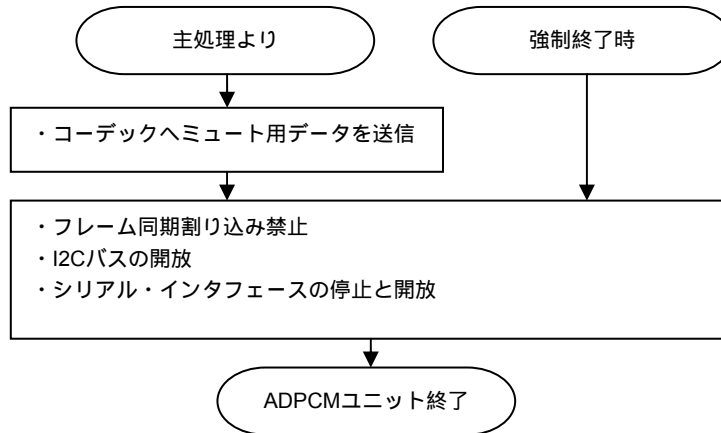


## 3.6 終了処理

コーデックをミュートし、シリアル・インタフェース等の資源を開放して処理を終了します。

### (1) 概略フロー

図3-8 終了処理の概略フローチャート



### (2) プログラム・リスト

```

void eADPCM_stop(void) {
    /* コーデックの終了設定 */
    ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, tcADPCM_close[0], tcADPCM_close[1]);
    ul2C_IO_write(CODEC_ADDR, tcADPCM_close[2], tcADPCM_close[3]);
    vTrans_task(eADPCM_end);
}

void eADPCM_end(void) {
#ifdef ADPCM_SP > 0
    /* FRAME割り込み禁止 */
    yFRAME_PIC = 0x42; /* INTP3 IF=0, MK=1, 優先度2 */
    zmPCL = 1;
    zmcPCL = 0;
#endif

    /* I2C_IO ロック解除 */
    gl2C_IO.adpcm = 0;

    /* CSI開放 */
#ifdef ADPCM_SP > 0
    if (tbADPCM_CSI) {
        /* 資源開放 */
        yCSI_CTL0 = kCB1CTL0_st;
        vSignal_sema(yCSI_sema);
        /* 資源ララゲ・リセット */
        tbADPCM_CSI = 0;
    }
#endif

    vExit_task(); /* 簡易OSを使用しない場合は,return文にします。 */
}

```

### (3) 詳細説明

コーデックへ終了時のデータを送信します。

フレーム同期割り込みのマスクと、マスタ・クロック出力の停止を行います。

I<sup>2</sup>Cバスの使用終了をI2C\_IOユニットへ通知します。

シリアル・インタフェースを停止し、共有フラグ (yCSI\_sem) を開放します。共有制御が不要であれば、単にシリアル・インタフェースの停止のみ行います。



## 4.2 実行モジュールの作成

本サンプル・プログラムの実行モジュール作成について説明します。

あらかじめ、推奨バージョン以上のソフトウェア・ツールをインストールして下さい。

また、使用するマイクロコントローラのデバイス・ファイルもインストールして下さい。

### 4.2.1 プロジェクト・ファイルによるビルド

#### (1) ワークスペース・ファイルを開く

次のワークスペース・ファイルを開いてPM+ を起動します。

・ SM07LD.prw / SM06KD2.prw

拡張子.prwで別のアプリケーションが立ち上がるようになっている場合は、PM+ 起動後に

「ファイル」 「ワークスペースを開く」 上記ファイル指定

を行ってください。

#### (2) ツール選択し直し

初めてプロジェクト・ファイルを開くと、バージョンに関する警告が出ます。

OKを押すと、選択画面が出ますが、いったんキャンセルします。

「プロジェクト」 「プロジェクトの設定」 「ツールバージョン設定」 「詳細設定」

で、画面を開き、使用するツールにチェックをつけます。

#### (3) ビルド

「ビルド」 「ビルド」(または「リビルド」)

によりビルドを開始します。

ビルド・エラーが出た場合で、最新バージョンのツールを使用していない場合は、念のため最新バージョンのツールをインストールしてビルドし直してみてください。

正規版ツールの場合、次のソース・ファイル入れ替えてビルドを行うと、後述のサンプル音声番号8および9の音声が聞けます。

・プロジェクト・ウインドウのソース・ファイル一覧に表示されているSound\_sample\_a.sを右クリックして、「ソース・ファイルの削除」を行います。

・プロジェクト・ウインドウのソース・ファイルを右クリックし、「ソース・ファイルの選択」を行います。ADPCM\_LIBの下のSound\_a.sを選択します。

## 4.2.2 プロジェクト・ファイルの新規作成

ダウンロード・ファイルに同梱されているワークスペース・ファイルを使わずに、新規にプロジェクト・ファイルを作成してビルドする方法について説明します。

### (1) ワークスペース生成

PM+ を起動します。デフォルト設定にするため、他のプロジェクト使用後は立ち上げ直してください。「ファイル」 「ワークスペースの新規作成」により、以下の設定を行います。

#### ワークスペース情報の設定

- ・ワークスペース・ファイル名を適当に決めて入力します。  
「空のワークスペース作成」にはチェックをつけません。
- ・ダウンロード・ファイルを解凍したフォルダ位置を指定します。
- ・マイクロコントローラ名 (V850ES) とデバイス名を選択します。デバイス名は、SM07Lボードの場合はuPD70F3736, SM05K2ボードの場合はuPD70F3740を選びます。

#### 使用ツールの指定

「詳細設定」を押して使用するツールを選択します。

#### スタート・アップ・ファイルの指定

「既存のファイルを使用する」を選択し、KERNEL¥Start\_up\_a.sを指定します。

#### リンク・ディレクティブ・ファイルの指定

「既存のファイルを使用する」を選択し、SM07LD.dir / SM06KD2.dirを指定します。

#### ソース・ファイルの設定

以下のソース・ファイルを追加します。

- ・ADPCM\_LIBディレクトリ  
正規版ツール : ADPCM\_LIBの下のSound\_a.sを選択します。  
フリー・ツール : ADPCM\_LIBの下のSound\_sample\_a.sを選択します。後述のサンプル音声番号8および9は実装されていません。
- ・Kernelディレクトリ  
Kernel\_a.s, Kernel\_c.c, Kernel\_data\_a.s, Kernel\_OPT\_a.s (SM07Lボードの場合), UDEF\_data\_a.s, UDEF\_func\_c.c
- ・TASK\_Aディレクトリ  
ADPCM\_c.c, COM1\_rx\_c.c, COM1\_tx\_c.c, Key\_code\_c.c (キーによる音量調整を行う場合)
- ・TASK\_L / TASK\_Kディレクトリ  
BTimer\_c.c, I2C\_IO\_c.c, Kernel\_init\_c.c, Main\_c.c

## (2) 関連ファイル指定

プロジェクト・ウインドウの「プロジェクト関連ファイル」を右クリックして下記を追加します。

- ・ADPCM\_LIBディレクトリ：adpcms\_26.a

## (3) オプション設定

「ツール」メニューで各種オプション設定を行います。

### コンパイラ・オプション

- ・プリプロセッサ

定義マクロ：KOS\_CODE\_TYPE=0

インクルード・ファイル・パス：ADPCM\_LIB, Kernel, TASK\_xxを追加します。

- ・出力コード

sconstセクションのデータ位置：“配置する”にチェックします。

レジスタモード：“26レジスタ”を選択します。22レジスタあるいは32レジスタを選択した場合はビルド時にワーニングがでますが、動作は可能です。

- ・アセンブラ：“「アセンブラ・オプション」を使用”にチェックをつけます。

### アセンブラ・オプション

- ・インクルード・ファイル・パス：コンパイラ・オプションと同じ設定をします。

- ・定義マクロ：コンパイラ・オプションの定義マクロと同じ設定をします。

### リンカ・オプション

- ・必要に応じて出力ファイル名などを設定します。

## (4) ビルド

「ビルド」「ビルド」（または「リビルド」）によりビルドを開始します。

エラーが出る原因としては、次が考えられます。

- ・必要なソース・ファイルの指定や関連ファイルの指定が抜けている。
- ・オプション設定が正しくない。特に他のアプリケーションをビルドした後で、本書指定外のオプションが残ったままになっている場合。

## 第5章 サンプル・アプリケーションの実行方法

この章では、プログラムの実行方法とホスト・マシンからサンプル・プログラム (ADPCM\_c.c) を動作させるためのコマンド例について説明します。

デモ用ボードの設定とホスト・マシンのターミナル・ソフトウェアの設定方法については、使用するボードによって異なります。以下のマニュアルを参照してください。

### (1) SM07Aボード + SM07Lボード

- ・「[ヒューマン・マシンI/Fデモ用ベース・ボード ユーザーズ・マニュアル \(U20117J\)](#)」
- ・「[ヒューマン・マシンI/Fデモ用V850ESボード ユーザーズ・マニュアル \(U20120J\)](#)」

### (2) SM05A2ボード + SM06B2ボード + SM05K2ボード

- ・「[漢字表示デモンストレーション用ベース・ボード ユーザーズ・マニュアル \(U19207J\)](#)」
- ・「[漢字表示デモンストレーション用V850ES/JG3ボード ユーザーズ・マニュアル \(U19210J\)](#)」
- ・「[漢字表示デモンストレーション用拡張ボード ユーザーズ・マニュアル \(U19526\)](#)」

## 5.1 プログラムの書き込みと起動方法

デバッグによる起動とデバッグを使わずにボード単体で起動する方法について説明します。

### 5.1.1 デバッグで起動する場合

ビルド後、デバッグ (ここではID850-QBを使用します) を起動します。

#### (1) 初回起動時にエラーが出た場合は消去 (イレース) を行います。

初回起動時に「このデバイスではオンチップデバッグができません」とメッセージが表示されることがあります。この場合はQB-Programmerなどで消去を行ってからデバッグを起動してください。

#### (2) メイン・クロックの周波数設定

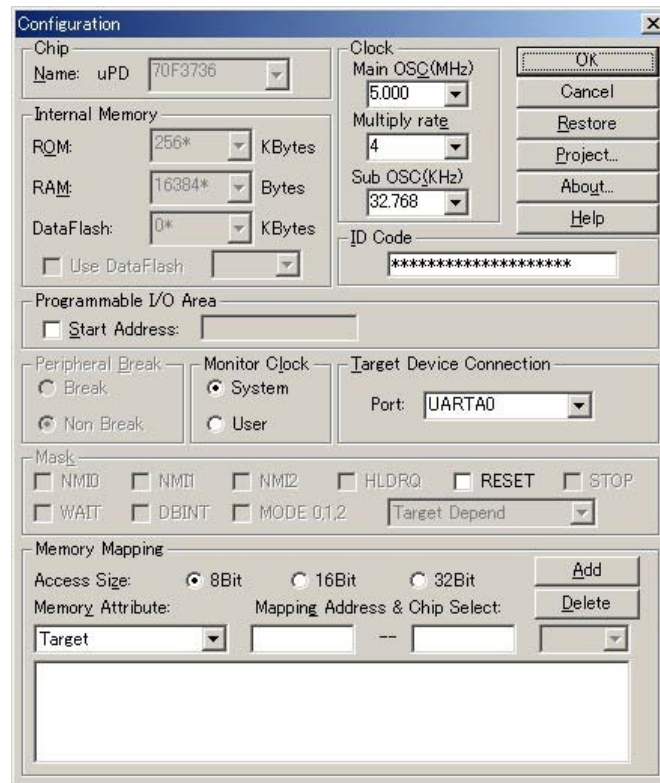
##### SM07Lを使用する場合

メイン・クロックの周波数設定は5 MHzにし、Multiply rateを4に設定します。

##### SM06K2を使用する場合

メイン・クロックの周波数設定は4 MHzにし、Multiply rateを4に設定します。

図5 - 1 デバッガ初回起動時の設定例 (SM07Lの場合)



### 5.1.2 プログラムで書き込んで起動する場合

ビルドで作成されたHEXファイルをプログラムで書き込み後、ベース・ボードからプログラムを外すとデバイス・ボードが起動します。



## 5.2 ターミナル・ソフトウェアの操作について

サンプル・アプリケーションが起動すると、ホスト・マシンのターミナル・ソフトウェアからコマンドを入力できます。コマンド入力時の基本操作について以下説明します。

### (1) キーボードからのコマンド入力

コマンド入力時の注意点を説明します。

#### コマンドの編集

コマンドはリターン・キーを押すと確定します。リターン・キーを押すまでは、バックスペースによる修正はできますが、そのほかの編集キーによる操作は無効です。

#### デモボードからの表示

入力中にデモボードからのメッセージが表示されても、表示がなかったものとして、続けて入力してください。

### (2) コピー&ペーストによるコマンド入力

コマンドは、後述のコマンド例をコピー&ペーストしても動作します。コメントも含めて複数行を一括で貼り付けしてもかまいません。

PDFファイルからのテキスト・コピーでは動作しない場合は、ダウンロード・ファイルのリリース・ノートの後ろにあるコマンド・サンプル集からコピーしてください。

## 5.3 コマンドの書式

### (1) パラメータ・ライト・コマンド

動作パラメータを書き込むためのコマンドです。アドレスとパラメータ内容を次の書式で入力します。

書式：\$mW' {設定開始パラメータ・アドレス} {パラメータ・データの並び}

表5 - 1 パラメーター一覧

| アドレス | 内容  |
|------|---|
| 0    | 再生終了メッセージの自動報告先のユニット記号を設定します。デフォルト値は“u”です。本サンプル・アプリケーションでは変更不要です。   |
| 1    | bit6：1なら以下のキー操作による音量制御を行います。デフォルト値は1です。<br>キー：音量アップ（スピーカ・ボリュームを6 dBアップ）<br>キー：音量ダウン（スピーカ・ボリュームを6 dBダウン）<br>>キー：AUXミキシング音量アップ（AUXボリュームを3 dBアップ）<br><キー：AUXミキシング音量ダウン（AUXボリュームを3 dBダウン）<br>bit5：1ならADPCMのビット数に応じて高域イコライザを設定します。デフォルト値は1です。イコライザのカットオフ周波数と調整量は次のとおりです（ADPCM-SPライブラリオよびその簡易版での伸長時）。<br>2ビットADPCM：5.3 kHz, -12dB<br>4ビットADPCM：フラット |
| 2~3  | BEEP周波数をリトル・エンディアンで設定します。デフォルト値は1000H（500 Hz）です。上限はおおむね3kHzです。<br>出力周波数 = 設定値 / 2000H [kHz]   |

### (2) ADPCM再生コマンド

サンプル音声として実装しているデータの番号と繰り返し再生回数を次の書式で入力します。

書式：\$mp' {データ番号} {繰り返し回数}

なお、繰り返し回数0で1回再生となります。またFFを指定した場合は停止コマンドを受け付けるまで繰り返し再生を行います。

表5 - 2 実装されているADPCMデータ

| 2ビットADPCM<br>データ番号 | 4ビットADPCM<br>データ番号 | 再生内容                                |
|--------------------|--------------------|-------------------------------------|
| 0                  | 1                  | 「料金は300円です」                         |
| 2                  | 3                  | 「現在の設定温度は25度です」                     |
| 4                  | 5                  | 「3階, 家具売場です」                        |
| 6                  | 7                  | 「お風呂が沸きました」                         |
| 8                  | 9                  | メロディ（Sound_sample_a.asmには実装されていません） |

**(3) 再生停止コマンド**

ADPCM再生およびBEEP出力を次のコマンドで中止出来ます。

書式：\$me

**(4) BEEP出力コマンド**

BEEP音を出力するには次のコマンドを使います。音の長さは10ms単位で指定します。

書式：\$mb' {長さ}

**(5) コーデックのレジスタ設定**

レジスタ設定を行うにはI2C\_IOユニットに対するコマンドを使用します。

SM06KD2の場合は、まずコーデック・アドレスを次のコマンドで設定します。

書式：\$IW'0 34

SM07LDの場合は、デフォルト値が34Hになっているので設定不要です。

次のコマンドでレジスタに値を書き込みます。

書式：\$ID' {レジスタ番号} {設定データ}

ただし、{レジスタ番号}の上位7ビットにはコーデックのレジスタ・アドレス7ビット、下位1ビットにはコーデックの設定データの最上位ビットを格納します。また{設定データ}にはコーデックの設定データの低位8ビットを格納します。

**5.4 コマンド例****(1) ADPCM再生と停止の例**

「料金は300円です」を3回再生 \$mp'1 2

「3階、家具売場です」を繰り返し再生 \$mp'5 FF

この状態で キー、 キーで音量調整が出来ます。

再生停止 \$me

**(2) BEEP出力例**

1kHzに変更 \$mW'2 0020

1秒間出力 \$mb'64

**(3) コーデック設定例**

SM06KD2の場合 \$IW'0 34

スピーカ・ボリュームを-40dBに設定 \$ID'6C 11

BEEP1秒間出力 \$mb'64

スピーカ・ボリュームを-25dBに設定 \$ID'6C 20

BEEP1秒間出力 \$mb'64

【発行】NECエレクトロニクス株式会社 ( <http://www.necel.co.jp/> )

【問い合わせ先】 <http://www.necel.com/contact/ja/>